

貞門 貞門の源流(「名稱」貞門)の源流を問ひ、貞門の方より古風と稱する。...

寛文の頃まで、延寶頃には「高世のすたりも」の中に散へられた。併し、この頃の勢力は元禄以後までに及んだ。...

心の貞門の傳系を示した。この方面の著作には、今で算文、朝江種寛の「諸書作者名考」...

テーマ「主題」を見よ。手鑑「書道」古人の筆蹟多くは断片を遺し、これを粘などに作り以て受...

ていもん てがたり

二二九

である。即ち太夫・三味線は本来、舞内乃至舞屋内の小高き床で浄瑠璃を語るのが原則で、聴衆客の前へ、語り手たる太夫が露はれて見

【別材】風鈴舞臺が、大家の娘を舞臺屋へ連れ込み、殺して金を奪つたといふ當時の實説を双鏡々の世界に准へた。

【序】(下) 藤野野郎(豊島家の婿)につき荒川左近使君に來り、結納の胡蝶の香合を受取らんとす。

【摘英集】(刊行) 安政四年「内容」その序はよく遊歌の態度を示してゐる。

る。遠山は假こめたり遠山をいよ／＼とほくかすみこめたり」と云ふ類の自歌も多く加へてゐる。

【作者】不明【成立】原本の奥に、「水鏡九年のへとら六月吉日これをかく」とある。

【作者】不明【成立】原本の奥に、「水鏡九年のへとら六月吉日これをかく」とある。

【作者】不明【成立】原本の奥に、「水鏡九年のへとら六月吉日これをかく」とある。



石井飛騨・伊藤出羽の芝居の機が鋭んで、これによつて観ると、機巧と手裏とを殆ど同義に用ひてゐる。寛永二年十一月、竹本座は筑後橋頭のため、新に竹田出雲が新座本として臨んだ。その初興行用天明職人職で、機巧の機、をやま入形松八郎兵衛が初めて入形の出遣ひをしたが、竹田の芝居の機巧をもこの興行に持ち込んだ。これが手裏入形で、をやま入形が機巧となる仕掛があり、辰松八郎兵衛が遺つてゐる。

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

る。また下巻には、「實踐理想主義は如何に現代の道徳を理解するか」近世思想とフレイドリヒ・ヒーストの經濟學說」などの諸論の外部に、長大論「島村抱月氏の自然主義を論ず」が含まれてゐる。それ故に、この書は抱月抱月氏の思想の批評を通じて王堂の象徴主義の内容を知悉することが出来るし、當時に於ける文藝思潮の變遷に自然主義の主張と論評とを知ることが出来るから、明治文學の研究書としても閉鎖すべからざるものである。

王堂は先づ、印象主義は象徴主義に移るべきことを論じてゐる。抱月も王堂も當時共に象徴主義者であつたが、抱月は自ら新自然主義の標式を取つた。王堂は自ら實踐理想主義の標式を取つた。又抱月の自然主義を批評する場合には、多くの點でその見解を異ならしめた。王堂によれば、自然主義は、無解決無理想主義ではなくて、有解決有理想主義でなければならぬし、また理想を排斥した現實主義ではなくて、現實を包含した理想主義でなければならぬといふのである。

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

刷するのが常であるが、宋代の刊本には、每紙の内面(即ち折目まで開く)丁のみ文字があつて、外面は文字がないのである。(表紙)前後二枚ある。最も簡単なものは、もとの紙の第一丁及び最後の丁をそのまゝ表紙に用ひたものであるが、その上に色紙や唐紙又は絹羅などを貼附したものがあつて、背にも糊を覆うたものもある。弘法大師講來の三十帖弟子の如きは、一枚の幅の廣い表紙をつけて表紙全部を包み、その端に竹を挿んで糊をつけて、糊を以て全體をくるむやうにしてゐる。これは巻子本の體裁を取つたものである。表紙は表紙に直ちに書き、別に題簽を用ひないのが常であるが、中には表紙の表紙の左方だけ色がはりの紙を用ひて、そこに表題を書いたものもある。(用紙)古くは主として唐紙を用ひたが、後には和紙を用ひたものもある。また唐紙や色紙を用ひ、或はこれに金銀の箔や泥で、裝飾を加へた甚だ美麗なものもある。(界格)普通の寫本には白界を施して用ひるのが常である。(丁附)丁附のあるものが多い。これは、もとの紙の一枚毎に、後の丁の裏面の折目に近く記入するのが常であつて、これがために、個目の中に入つて透かされなければ見えない。また巻末の丁のこの位置に書寫の興衰があるものもある。

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

や折本に比しては、便利な點が多いが、糊に比しては、綴目の堅い事、及び紙の多少を加減する事が自由である事、袋綴に比しては、紙数を多く要しない事、ぐるりの長所があるに過ぎない。さうして裝幀は、これ等に比して多くの手数を要したであらう。

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

【参考】音曲道智篤○佐渡島日記○歌舞妓事始○蘭遊笑覧○用明天皇職人職書并し別訂解題○人形道者語○許多脚色稿 (石井)

の所謂「結語」に對してである。「結語」に於ては三轉(終止・連體・已終)四十三段に關したるが、轉門はこれを五轉とし、第一轉終止、第二轉連體、第三轉已終、第四轉使令、第五轉已終言と命名し、次に「使令」と名付くる一段を置いた。この六段の分け方及びその命名は、春庭の「詞八箇(詞類)」に於ける「四段の活(下)二段の活等の分類命名と共に、國語學史上、特筆大書すべき事である。また「友誼」では、「結語」の四十三段を訂正して五十二段とし、活用語の凡ての形を網羅した。因みに「友誼」を更に訂正して「和語説略」(詞類)を著した。大田豊年の「結語中之心」(二卷)は、上巻は「結語」を註解したものである。下巻は「詞の玉緒」の註。嘉永元年三月附録「結語」の序がある。刊本。橋本武陽の「結語傳註考」(一巻)は「結語」の略解とも見べきもの。附録に、活用しない結語「詞の玉緒」から抄出して掲げている(文化十三年の著)。殿村常久の「かたばみ」(一編)(文政十三年刊)は、「結語」の玉緒(詞八箇)の三書に依つて、手廻り波のとのへ、言葉の活きを圖にしたものである。(詞の玉緒) (詞類)

てには網引綱(詞類) 語學書 二巻 二冊【著者】井井道徳【刊行】明和七年九月。後編のすがき(二巻)と合編して詞のあきく(二巻)として文化十一年四月刊。【内容】てには網引綱の研究である。上巻には「てに、を、は、そ、こ、と」以下、下巻には「けり、ける、けれ、けん、き」「なり、なる、なれ、也、けり」以下を擧げて、一々意味、用法を説き、古歌を例証に擧げてゐる。最初、「てには」といふ語の起原に關する従来の説(「てには」は「て」と「は」を附會であるとし、漢文

に附した平古止點(詞類)の四隅にあるテニツハの四點から出たものであると主張し、定家の著といふ「てには大綱抄」(詞類)の書體であり、又「春庭詞抄」(詞類)の信用し難い事を述べてゐる。終りにてには用字の事と題して、近代のてにはの諸註に、てにはといつてゐるものの中に「唯」(二)など、詞を混じてゐるの事を論じ、かゝる杜撰なる説を駁傳とする事をおたはらひたいと評してゐる。【價值】本書は「てには」研究書としては官長、成章以前のものとせば最も優れたものである。研究の態度は自由であり批評的であつて他の説にとらはれず、從來尊重せられた諸書をも斥け、新説を出してゐる。さうして経傳口訣の類を學問資料の因として擧げてゐる。著者のてにはの語源説は卓見であつて、爾後學界の定説となつた。又てにはと詞とを區別した事、本文中に、てにはの活用しないもの(今の動詞の形と活用するもの(今の動詞の形)とを區別して擧げた事(多少混じたものもないではない)も注目し得る。又活用するものには、「けり、ける、けれ」「なり、なる、なれ」の類をあげて呼稱を示してゐるが、これをなほ一歩進めれば官長の「結語」や「詞の玉緒」(各詞類)の如き係結の研究となるものである。要するにこの書は、てにはを研究史上、特筆すべきものである。(詞類)

手廻り波大綱抄(てには) 語學書 一巻【著者】藤原定家と傳ふ。但し疑はしい。「成立」明かでない。但し本書の註釋である「手廻り波大綱抄」(巻首)は、文明十五年に出来たやうであるから、本書は定家の著と云ふ事には疑ひを拂ふても、同年以前の子であることは疑ないであらう。【内容】

本書は、全部漢文で記されてゐる。「手廻り波大綱抄」には、全字數六百四十三字と記されてゐるが、現存のものは六百四十八字ある。先づ歌妻の尊卑は手廻り波に依つて定まる。手廻り波を巧みに用ひれば、鬼神も感涙を感ずるのであると説き、云ひ切らざる手廻り波の歌の結句に置く法。「つ」「こ」の用法。「や」には疑ひ、頗ひ、推量等十種の用法があること。「そ」の用法。「か」には、疑ひと哉の意と二種ある事。「輔字(んむ)の用法。「か」は、や、め、や」の用法。「も」「か」も二種の用法がある事。「か」に、頗ひ、治定等六種ある事を記してゐる。【價值】本書は手廻り波について記した書の中、最も古いもの一つである。内容は學術的には必ずしも高い價値を有するものでないが、この種の研究が漸次進んで、手廻り波の呼稱、活用の研究となつて行つたのである。即ち本書は、「結語小路式」(詞類)等と共に國語研究の一つの源泉となつた點に、歴史的價値を存するものである。【未考】「手廻り波大綱抄」(一巻)一冊、宗藏著。宗藏の奥書は文明十五年正月十八日とあるから、その頃の作と思はれる。初めに「手廻り波大綱抄」の本文を掲げ、次に本文を一句づつ出して、逐條本文の大意を記し、古歌を引いて説明してゐる。「手廻り波大綱抄」を見る人は、必ず参照すべきものである。【備考】「群書」一覽に採録した寛永二年刊行の「てには大綱抄」は、本書と名は同じであるが、内容は異なるものである。(詞類)

照葉狂言(てには) 舞臺 舞臺【著者】不明【刊行】不明【内容】

興行せし。見物多かりし故、江戸にても之をまねびしもの多かりけれど、いづれも拙かりし」とあるが、一座中で若手の花形片岡秀三郎は、詞も出来て鳥鼠の寄も妙からず付いたといふ。【沿革】「日和茶屋」の作は、本行の能狂言から、わづかに暗示を得るに止まり、後狂言・茶番狂言の面影が多分に比し、「約子定木」の方は可なり本行に近く、而も茶番趣味もあつた。思ふに前者は照葉狂言の古態であり、片岡老人作とあるも、或は編撰の意味であらうか。明治初年には、京都、名古屋に行はれ、美観の女優も加はり、道成寺その他に能樂をも演じて、こゝに三度の變遷があるが、それを最後として亡びたのは、元來が獨立性のないものだからであらう。(小笠原)

照葉狂言(てには) 小説【著者】泉鏡花【發表】明治二十九年十月、讀賣新聞連載【刊行】三十三年四月、春陽堂、繪花全集第二卷(日本小説文庫)所載。【提要】買は兩親を失ひ、伯父の家に引取られてゐる身の上、眞向ひの廣岡の娘お雪も、邪智な繼母に育てられるはかない身の上、お雪が買を又なきものに思へば買も亦お雪を姑のやうに慕ふ。たま／＼近所の廣岡に照葉狂言の一座がかゝり、買は毎晩見物に行く。一座の若師匠小親は、色白く髪黒き少年の客を一夜後敷に招いて懇話したが、歸途お雪と共に襲はれるのを助けて家まで送り届けた。それは買であつた。恰も伯父の一家は賭博の現場を踏み込まれて、伯母は目前で警官に引立てられて行く所であつた。全くの孤兒となつた買は、その夜から小親に養はれて一座の身となつた。賭博を廻つて八年後、小親の一座は興行のために再び買の故郷を訪れる。買

にとつては、別れても忘れ得ず、日夜懐しく想つてゐたお雪が、殘忍な續母の子のために虐遇されてゐる故郷である。その氣の毒な地酒と小親の愛情に昵れ我が身を比べ、省み、そのまゝあるに堪へられず、思ひ切つて擧ぐ、せめては救ひ得ぬお雪の悲運に併いんがため、小親をも永久に捨て、夜半密かに一人山路を越えて行く。【解説】作者自身の言葉に依れば、この作品は森田外郎(即興詩人)(詞類)にヒントを得たものであつた。少年の遺棄なき純な思慕の情、女藝人の義理人情、それ等は「誓之巻」(詞類)と同じく、浪漫派の詩人にとつて高切なる題材であつた。作者の特色である色彩豊かな繪畫美は、清新な筆致と相俟つて、この一篇を一層尊麗な物語にしてゐる。(水上)

照日葵(てには) 歴史小説【著者】須藤南翠【角書】表題に「照日葵」と冠されてゐる。【發表】明治十九年一月より四月迄改題新聞に連載【刊行】同二十一年七月春陽堂。【提要】慶應年間、陸奥の名取に城を構へた大領治郎は、その妻淺香に子がなないので、一戸治郎の妹松島を奪つて室とし、治家を設けた。ところが、その後、本妻の淺香が赤坂屋を生んだので、波瀾が起るものになつた。兄の治家は性質溫和であるが、妹の赤坂屋は男まさりで、幼時から武術を嗜んだ。個々治郎は其の臣下から或る香袖を献上され、家中の者に讀ませてみたが、誰も分らなかつたので、「この字を讀み得る者には最愛の娘を與へよう」と云つた。ところが、藩のお能師で、忠誠の士と云はれた大館段左衛門の長男主税介(正良)が、見事にそれを讀み得たので、治郎は感賞

し、約の如く娘を主税介に與へ、その婿と定めたのである。日ごろに思ひをよせてゐた一戸治郎の長男正良は心中甚だ難かならず、叔母の松島を動かして、娘を自分のものとしてよつとあせつた。それで彼は一計を案じて、大館一家のことを論じたので、段左衛門は、領主の不興を蒙つて流刑せられ、悲憤の中に自刃した。主税介は復讐の念燃ゆるが如く、娘と別れて江戸に上つた。民部は娘に再嫁を勧めたが、娘は断つた。幼かに男裝して主税介のあとを追つて江戸に上つた。時に主税介は敵方の刺客の害を免れるため、女装してその同志を糾合することに力めてゐたが、捕へられて下總の法華村に幽閉せられた。が、機を見て抜け出し、實弟及び同志と協力して、多賀石見、一戸民部、その他を救めたが、敵の奸計に陥り、赤坂屋は高橋につるされて擧殺された。主税介等はなほ屈せず、暴風雨に乗じて襲撃し、地雷火を爆發して逆臣等を殺戮した。【批評】脚本式、草書式の特徴を取合せて、事件の奇を以て讀者を動かさうとしたところが興味がある。が、不自然、誇張のあとの多しを遺憾とする。(澤村)

哲烈編纂(てには) 小説【原書】佛蘭西十七世紀の哲人フュメロン(フランソワ・アドゥル・ヤック)の著「フュメロン」の著「テレマック冒険譚」【刊行】明治十二年五月一十三年六月迄に既刊八冊(總定三十六巻)。【解説】古ギリシャ神話時代の英雄テレマックが、父を尋ねてマントルと共に漂泊の旅にのぼり、諸所方々で種々な苦難厄災に遭ひ、人生の經驗

として佛式兵書の譯述に従ひ貢獻する所があつた。この間、嗜好してゐた音楽の研究に努め、舞臺共に新道の興隆を極めたが、音楽の不振に憤慨して、國樂制定の説を唱へ、遂に陸軍調音官の職を辭して、國樂協會を創立した。前年二十五年、爾後百方苦心、新曲新舞を製作し、東京に於て公演すること十數回に及んだが、観客不意のため郷里に引返し三十一年の冬、松代國樂協會を起した。これは今日にほ現存してゐる。



(藤田氏蔵) 備用心記の一場

【作者】月亭堂【刊行】寶永六年【名稱】備用心記【書名】「備用心記」にならつた命名であるが、

九篇に収められてゐる。【解説】書名のみでなく、内容形態ともに「備用心記」を模倣したものである。内容より見れば、備用心記は廣く、單なる詐偽取財などを意味してゐない。但し説話の最も多數はそれ等の類である。中には武士藩村右衛門の子小太郎(十五歳)が、同僚松村太夫の子小太郎(十三歳)のために討たれた。すると村太夫は家来勘八をして小太郎を藩村方に同伴させ、御子息の敵ならば存分にせられよといはせた。勘八は途中から小太郎を背負つて出奔したので、藩村方でもせん方なく、世間では義を重んじた村太夫の遺骸を稱揚した。所がこれは、實は村太夫が勘八に言ひ合せて出奔させた偽計であつたといふ人情に基づく策略もある。又或る夜地震があつたので、玉簪屋光右衛門の宅でも皆起き出した。そのために銀梅と新平手代今右衛門との密會が露はれた。然るにこの今右衛門と梅とは戀仲で、今右衛門は銀梅の町人の息で、戀のために身を賣つてこの家の手代となつてゐたものであることがわかり、二人は結婚させられたといふ戀のかげ引もある。又遊女を身請しようとした男が、毒藥心中を申出で、女が藥を飲むのを見て、その心を癒めて身請けた話もある。かく單なる詐偽の手段の面白さはばかりでなく、廣く社會の諸方面に互つてゐるのは、かゝる類の書としては尋常取るべき所であらう。

七年九月の雜誌「中外」に發表されたのであるが、その後、同年十二月に出版された短篇集「病める書」の中に、前記の病める書「備用心記」改作されたものと「田園の憂鬱」として發表されたものとを合して、病める書或は田園の憂鬱なる題下に載せられた。更にその全部に互つて改訂増補されたものが、大正八年六月單行本「田園の憂鬱」として新潮社から刊行され、定本となつてゐる。現代日本文學全集第二十九巻所載。

【解説】都會の重壓と喧騒に苦しんだ彼は、其處から脱れて彼れを休めるため、妻と二匹の愛犬を伴つて、武藏野の南端の草深い田舎に引移つて来た。こゝも同じ木立の中の古びた新居は、さゝやかな暮らしを始めようとしてゐる。彼の氣に入らなかつた。夏は自然は何れも樂しげに輝いてゐた。彼は物珍らしげにそれ等の一つ一つを眺めやうとした。秋が訪れて来た。彼のいらだたしい氣持も漸くしづまつて行くかと思はれたが、感情の弱り切つてゐる彼は自らたわいもなくその環境に酔ひ、とりとめのない空想に耽つた。その中に、びよ／＼と兵衛が降り出すと彼の心は又しても變り始めた。家の内にも外にも、急に陰鬱に感じられた。彼の憂鬱は前にも増して濃くなつていつた。いらだたしさはいよいよ内攻し、現の中にぼんやり夢を見てゐることがあるかと思ふ。何でもないことだがひどく氣になつた。遂には安らかな眠りの得られない夜が續くに伴ひ、思ひもかけない幻燈や幻覺を體驗するやうになつて了つた。いゝ／＼の幻覺に怯えながら、彼は心の衰への中に暗い未來を感じた。それを象徵するかのやうに彼が前から眼をかけてゐる。

【田園文學】(田園文學) 田園の事柄風光を描出した文學であつて、舊くは中世紀の騎士と牧者、或は牧人と牧女との戀物語、所謂パストラル(Pastoral)と呼ばるるものから、近代の田園物語、例へばフランスのジュ・オルジュ・サン・ド・ヌヴィエの牧場の如き、或は英國のトマス・ハアディのウツセクスを舞臺としたる多數の物語の如きに至るまで、廣く田園事柄を描き、且つ物語的文藝を指すのであるが、最近代に至つては、それが地方主義文學(La Regionalisme)と、更に農民自身が筆を執るに於て、自分等の率直な表現を持つやうになつて、所謂農民文學なるものが次第に發生しつゝあるやうになつて来たのである。併しこれ等は、最早田園文學と呼ばれるべき範圍に屬するものではなく、全く別種な新文學と考へられる。所謂田園文學に屬せしむべきものは、都人士の或は有知識の人々が田園を眺めたり、若しくは觀察し、研究して、その感想を歌ひ、その生活を描き出したものであるであつて、決して農民自身の文藝表現ではないのである。十八世紀に於ける英國の詩人トムソンの「四季の賦」の如きは、その代表傑作であり、同じくゴルドスミス「愛村行」の如きも著名な作品であり、ロシヤの作家ツルゲネフの「農人日記」の如きは、まさにその世界的名著である。明治文學に於ける長閑の「土」の如きも、その上乘の作品であるといへる。

【題材】寛政の改革と、その前後の社會の重大事件【書名】「寛政の改革」(田園文學) 寛政の近代日本文學大系、寛政の改革(武藏野)三巻所載。

【解説】開闢天皇、右大臣菅原道眞公を輔佐と仁政を施し給ふ。聖代のしるしとして金山が金銀を降らせ、五穀は豊饒、庶民の喜びが、戸の要がない。乞食は襤褸の錦に海狗のめんつうを持ち、勸進帳術が晴天十日間はれる。吉原の娼客も遊女も武技に優り、芝居は佛敎に題材を得た脚本で興行し、金銀の拍物があり、麒麟の見世物がやうり、風船が出る。人の定命は百五十年に延び、百一歳で誕生の祝、それから七十五の祝をする。大明から女人國・對國・大人國まで來賓する。道眞公は天滿大自在天神とあがめられる。



寛政の改革の一場

【解説】松平定信の施政改革は晴天の霹靂の如く降り、昨日の遊蕩武士も粗服を纏ひ、心にもない文武の稽古をした。作者は潤つて、改革前の事件をも取入れて、それを定信の上に乗せてゐる。天明三年七月の津間の噴火、江戸の降灰、天明二年から七箇年に互る大饑饉、天明七年五月の米騒動、安房國富岡山に於ける牧羊牧場、生活と衣食の増加等を加へて、本書の趣向を立てた。三和は「寛政の改革」(寛政元年)に

於ても相模次第の野暮を當世の流行とし、おさんの戀の對象を、橋本太に持つて行く種々の困難が人々を呼んで、大當りを取り、三月頃まで市中を賣り歩いたと言はれてゐる。本書の風刺は、やゝ流弊で、定信は何の演説も無く、定信は菅原の家筋である故に、海狗と云ふと衣紋として道眞に擬し、開闢天皇御年十三歳は、安永二年十月生の將軍家齊にモデルがあるらしく、檢見の役人を置いて百姓家の旗に丸に四つ目の紋を附けて、役人の難人であるかを暗示してゐる。天明七年五月の打撃を世評のまゝに天狗のやうに描くと云ひ、武蔵野を勧進帳術とひやし、老人夫婦の七五三の祝を以て、定信が憂國に入らなかつたから實施して来た老政策を諷刺し、明年に入賞の豫定である琉球の使者の先を越して、手長足長まで踏へて茶化すなど、政變を對岸の火災視する大衆には、多く笑の種となつたらう。繪は大きめに下ぶくれの容顏の人物を以てし、自由さを缺き、問の投げた感じが本文に氣分上の一致を見せる。「史的地位」寛政改革を題材にした作品

規模の大小や出演者等によつて、芝田樂、大田樂、小田樂、神子田樂、徒田樂、村田樂などと區別された。芝田樂は「平家物語」の願立の條に初めて見える語で、芝生の上で行ふ意。大田樂は大がかりの意。堀河天皇の水長元年七月二十三日の兩日、京都で盛大に行はれた。一般の老幼道俗だけでなく、納言・参議の月御雲客迄が異装を被らして歌舞の群に加はり、非違を極めず、檢非違使が禁衣を著して共に踊り狂つた。...

さうして神事に用ひられた田樂の服飾のみが書留められてゐる。嘉慶元年の「春日臨時祭記」に「就中於田樂儀樂之裝束者、偶以羅縠綾羅、隨面々之意行、令用意之間、色々行粧、毎一人花鬘、外見之所、及敷重之結構也」とあるから、室町の初世もやはり人目の眩耀に努めたといふべきである。...

は立合といふがある。一足は一本足の意で、棒に附けた横貫に左右の足を置き、棒の上部を兩手で握つて歩くこと。高足は今の竹馬の如きもので、北野神社の祭禮の際に、この一足を高足とを明瞭に描き分けてある。...

大夫任職なくは踊つて置かせ申す。正月はひつきと祝ひ。二月はさくら。三月は雛。四月は卯月。五月はつき。六月は水鏡月と申し。日鳥居事御寺の聖員。願しき事は今きたらぬ風の御。世方世界へは、ともし。何と願しき事の候。...

樂になつたのは、水に入つてからで、當時入湯料を取るものは、除染でも曲舞でも平曲でも田樂でも、皆湯通といつたのである。室町の中世からは田樂は次第に衰へて、勧進のことも減じ、江戸時代に入つては絶えて行はれなくなつた。...

一番 中門口。二番 裝束被下。三番 刀玉。高足。四番 もどき。開口。立合。五番 御能。六番 狂言三番。...

男子 十五本 笛の笠 一。太鼓笠 十二枚 太鼓 五。被笠 十 腰皮 五。高足 二足 同布 二足。...

た腰左がある。明治維新後中絶。大正十年古巻に傳習して再興。年々七月十四日の那智神社祭に行ふ。刀玉・高足等の曲技はなく、又諸ひ物もなく、車の笛に合せて舞ふ。...

(二) 樂 田



春日宮若宮御祭所圖



金山沙山樂圖

餘樂館の大威された時には、田樂の能に發進の色は著しかったのである。室町時代の中葉...

【田樂の香組】文安三年三月十七日、伏見宮直常親王は奈良の住心院に成らせられた...

これは本座の演技で、當年十七歳の福若丸が中心に立つたのであるが、同輩や藝風に關しては、更に傳はつてゐない。

前場の括弧内に示した如くである。親王御成りの翌十八日、將軍義隆の弟義親(後醍醐天皇)が田樂見物のために住心院を訪れた。この日の能は八番であった。

【一】水鏡の能(神代卷) 【二】源氏物語の能(源氏物語) 【三】...

住心院の住持、大僧正實宣の記によれば、見物は前日に通過し、能が終つて後、會所に於て舞や音曲があり、鼓樂を奏けたまふで廣院

てんかじ

で何をいひかはして能の形をなし、すなはち仕舞をなし、狂言も兩三番演ぜられたのであつた。右八番の調草は同じく傳はつてゐない。

【裝束の能】文安以後田樂は益々衰へた。而して曲名も香組も記録の上には見出し難い...

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

樂館の狂言と同一名のもの三十三曲を香組の中から見出す。けれども實際演ぜられたものは極めて少数であつた。多くは香組初頭の一番だけで、それも概ね半能で、次の狂言以下一切に關しては大夫親筋の由を續けて演じなかつたといふ。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

た。四幕目道行淨瑠璃、大夫官藤氏大夫ワヤ同和圖、三味線竹澤伊三郎。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

【合浦】合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたことあれば、全然省略したこともあつた。

1181

とあるが恐らく本作と同一物であらう。...

【初段】(大序) 新年に院の御所で、故...

處へ時景親子が親王の仰せと稱して、天鼓を...

【三段】(段) 嘗て陸奥の内侍と通...

聞き覚えの曲が洩れて来るので、懐しくて忍...

【四段】(段) 中將の行方を探ねる徳若、才若...

の聲の御殿で七夕祭をしてゐる所へ、時景親...

【五段】(大切) 親王が三笠山...

生活に備へて一旅の生活を知りながら冷淡を編...

【批評】當時に於けるこの作家は、所謂巨匠の...

【天才主義】(天才主義) 理想的な社...

【各題ごと】その法式に則り、平仄排列の...

【詞】(詞) 意は詩の長短...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

【参考】(参考) 藤田氏「文」...

歴しなかつた本集は「源家文正」に比すれば鮮少であるが、その時としての實に於ては、平安前期の盛唐・中唐の風を説して、自ら潮氣を含んでゐる。併し和歌の隆盛と共に、又唐との交通の杜絶に伴ひ、當時の儒者の詩集の多數は散佚して傳來しない。されば三巻と雖も本集の存する事は、日本漢文史上の重寶と言はねばならぬ。(原田孫三郎) (山形)

【参考】菅原文章(源朝)○本朝文粹(源朝)
【點式】(名義)佛語に評點を施せる法は、引印と點印であるが、點印は後に起つたもので、古法は引印が基本であつた。等號を附けるために引印に丸を加へたり、また引印以外多重の文字を書いたりした。即ち古法は長、珍重・平の三種で、このうち平・長は引印で、珍重は文字を書いたのである。平點は一線であつたが、長點は二線で、秀句に感じ一點では足りぬといふ所から二線にした。仕舞きところをうまく附けたのは珍重であるといふ意味から、珍重の文字を書いて、一點半にした(源朝)。「源朝」の即ち句の傍に珍重の文字を書いて、長點には及びぬが平點よりは勝れてゐるといふしるしにしたのである。又長點の中、最も秀でもたは、それに未聞を加へて後述し、三點とした(源朝)。「源朝」は併し長點を三點とし、平點の側に未聞を附けて二點とした例もあつたのである。長點に關する注中の説によると、餘り面白い句には、上から點をかけて句の下まで引下げて二點で足らず、下にぐる／＼たぐつて數々のも書かかけたのである(源朝)。「源朝」の點印は餘りに段々點を多くかけるやうになり、延いては

點印を設けて、それ等に點數の等級を定めて置いて押すやうになつたのである。【沿革】引印、點印は貞門の安原直道より始まるといふ説があるが、藤門以前は一般に引印であつた。元來點式は和歌に始まつて、古はつまじりしと云つてゐた。即ち歌を見て、これは勝れてゐると思ふと、食指を伸べて爪形を横に附けたのである。その上に再吟して、初めの爪形を加へた上に、また重ねてつまじりしをかけるのを長點と云つたのである(源朝)。「源朝」の所引(源朝)は、佛語もこれに倣つて點式を定め、貞門では長點・丸・珍重の式があつて、主なる門人はこれに従つたのである。而も合點は百韻の中、二三十句に過ぎず、長點のものも亦二三十句であつたが、藤林に至つて次第に點の句が多くなり、諸國に題文を題して同韻を勸め、わけもなき佛語に百句の中七八十點、長三三十もかけ、初心の歡心を買つたのである。芭蕉は點取を曉れた人であるから、點式などはなかつた。ただ加筆したる批評したりして門人を導くだけであつた。尤も探久・拙詩・式之三吟・歌仙に點をかけた一巻が、依古の「芭蕉阿古人讀」に出であるが、それは恐らく一時の興であつたであらう。併し門人中、其角・風雪等の如き點取を樂とした者の中に點式は復たした。殊に其角は平・面美人の文字を空の印に彫刻して點式とし、又「花影上」新月色・雪等々の文字の印も用ひてゐた。風雪にも百花圖・盛玉華・奔晚草・探春・探春等の點印があつた。これらの點印にはそれ／＼相當の點數が定められたのである。貞門では一點二點三點よりなかつた點式も、以來點數が多分に生ずる事になつたのである。其角以後、江戸座(源朝)の

宗匠は多くの點印を作り、點取に俗衆の歡心を買つたのであるが、それでも最高の點印が十七點・十八點・二十點位のものであつて、京版の如き高點の點印はなかつたのである。併し最高點印にかくし點といふものがあつた。京版では其角門の漢々が落し歸るや、其角に倣つて點格を立て、七點より百點までの花押を製し、朱青兩肉を以て印を形し、一巻を潤色したのである。點印に青肉を用ひる事は漢々に始まつたのである。漢以後京版の宗匠は、百點・百五十點以下、七百點・八百點・九百點・千點までの點印を作り、盛んに點取を鼓吹したのである。藤村門の雄高井凡重が、その俗化を嘆き、一點印を著して十印・二十印を限るとせるを「常流とす」と云つてゐる。今日では、新派系統の俳人は點印などを顧みる者もないが、舊派の宗匠の間にはなほ種々を留め、平拔五點より感吟二十點の程度で點印を作り、中抜以上は中央のよき所に實美の點印を押し、これを點式としてゐるさうである。【研究史】「點式」の研究は、源朝の「源朝」と云つて、幻住庵で、正秀・尙白の書に對して書いたといふ點印論が傳はつてゐるが、正しく論評である。點式の研究では、注の「點式」とその中の「源朝」が参考になる。江戶座の宗匠の點印論も傳はつてゐるが、引墨の標榜や點印の押し方なども知られ、又江戸に於ける點取供儀の流行も知られるのである。宗匠は後來に京版に於ける宗匠の點印論を傳はつてゐるが、京版に於ける點取供儀の隆盛さが知られるのである。(源朝)

【参考】源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正

【参考】源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正

一大事との書狀が来た。(大前)首のない義照の體を中央に、浅香御前御初め人々が、源家文書は落ちてゐた小柄を脱ぎ、捕縛を前に、浅香御前の計らひで捕縛と解は追放に處せられた。(堀尾)義照の遺體が送り出される。(堀尾)柏木は捕縛の跡を追はうとして、堀尾を乗りこける。文書がこれを書「よう」としたが、この時能が現はれるので、四郎は、能は池に入り、血汐に染まつた天竺瓶が義照の首をくはへて空を飛ばす。「二幕」(出陣の場)比叡山の普賢坊の手から献上した赤松則頼奉納の刀朝路丸の



(源朝正) 源朝正・源朝正・源朝正

倒幕の事を託して傳來の一巻を流す。これを見た徳兵衛は、捕法成親と悦び、吾こそ高麗王下正林桂の子息七草七郎と名乗り、日本の玉たらんと決意を告げ、驚く長慶を首にし、親子の眼を斬り、若手の源元と再會を約束して別れる。「三幕」(源朝)捕縛の跡と捕縛能が、無難に賣められてゐるのを救ふと見せたのが、その親方の徳兵衛であつた。徳兵衛は捕縛を抑へて、徒黨に入れと強ひたが、文書が来かゝり、追ひつ追はれつ行く。相馬四郎五郎は洗物を済まして来ると、大鮎が出て来たので、呪文を唱へて去らせる。彼は捕縛の家の家来初瀬入であつた。徳兵衛の女房お舟は、室町前忍び入り、高麗の人質たる若科を奪ひ歸る事を兵人に約束する。(四幕)「千巻」西座敷には捕縛が歸來をなし、東座敷には揚羽紙が花を活けてゐる。お舟はふかねと名乗り、仕へて中央の間に祭を飾り、二人を慰めてゐる。歸歸した四郎六郎は、體によせて突き出したふかねの剣を落し、徳兵衛の女房と覺つた。徳兵衛は勃然と驚いて入り込んだが、六郎は、勃然の前にふかねの斬り文を引出し、

徳兵衛の人間性を求めたものであらう。能之助と鬼竹、捕縛能・柏木と捕縛能等の存在は、捕縛した反逆者に對して備へたことと十分であつた。本作から、後の「源朝正」人物論(源朝)へ、部分的に彩色の影響を與へた點は少なくない。本作は寶曆十三年四月、竹本座に浮瑠璃「天竺徳兵衛」(作者不明)として上演された。三幕に能竹作として興行された。文化元年、江戸河原町で松屋の出世劇となつた。鶴屋南北作「天竺徳兵衛」(作者不明)は、本作の幻術方面を主として、書き替へたものである。現存、五代菊五郎以来、尾上家の能となつた。「天竺徳兵衛」は、更に「源朝」から出たものである。(源朝)

【参考】源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正

源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正

源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正
○源朝正・源朝正・源朝正・源朝正

宗廟に教はれる。(二)孫(右衛門宗廟)宗廟
實は、(一)の区下木曾宮で、舊來久吉を亡ぼさ
んとして歸朝し、折朝、天然に流れて歸朝
した頼朝の長男は、一子大目丸に孫の紙術
と浪切丸を譲り、妻夕良と共に自衛する。(三)
手紙の口、紙術を會得した頼朝は、孫に身
を懸けて立退く。(三)高砂御流(高砂御流)月
の乳人五百は、若君を尋ねてさまよふ所を
天然御流に斬られる。(四)高砂御流(高砂御流)月
實は尾形十郎に月若丸を譲り、十郎は妻お
つなとの間の一子お沙を身替りに立て、投入
桂源吾に譲す。天然御流はそれを知つて十
郎を斬らせんとしたが、父作太夫の話しで二
人の御流は肉身とわり、立ち別れる。(大)
助(瀬川左京衛)天然御流の大目丸は、父
の遺志を受けついで久吉を亡ぼさんとし、先
づ瀬川の館へ越後御流となつて入り込んだが、
左京に見破はされ、次に此村大炊之助と變じ
て上使に來り、我が奪ひし浪切丸を返還せん
としたが、眞の大炊之助來つて大目丸を見破
はし、且つ己の年月編ひし左京の切腹で大目
丸の紙術も授け、再會を約して別れる。

伊左衛門 巳の年月編ひしは山三の妻某女
と役名も一定して現存に至つた。(一)高砂御流
傳習録(高砂御流)子書傳習録(高砂御流)三卷(著者)
王陽明 陽明名は守仁、字は伯安、成化八年
(一四七二)三(三)餘姚に生れた。人となり豪邁不
羈、任侠を以て自ら居つた。弘治十二年(一五〇二)
二(五)高士に及第し、翌年初めて仕官した。
同十八年、使臣劉瑾が谷大用を擧動するに坐
り、貴州の龍巖縣丞に貶職せられ、赴任の途
上、龍巖の道に刺客に追られたが、龍巖にその難
を免れ、又龍巖の厄に遭つたが、幸うして
事なきを得た。これより先、彼は佛老に性清
したが、龍巖に至つて深く閉居する所があつて、
遂に知行合一の旨を説き、一家の學を組織
した。時に正徳改元の號であつた。同五年、
劉瑾等が倒れるに及んで、復び召されて庶役
の知縣となり、擢官は益々進み、弟子は愈々
多きを加へた。時に往々夜半の夢に於てつ
けれども、嘗て一日も學を廢めなかつた。同
七年(一五二二)八(五)七歳を以て歿した。陽
宗の代に至つて新建侯を擧げ、文成と諡せ
られた。その陽明は、弘治十六年、曾輝宛
委山の陽明祠の中に室を築いて住んだからで
ある。(一)陽明(陽明)の檢査(陽明)傳はこれ
を師に受けるを謂ひ、(陽明)傳はこれを
を謂ふ。(陽明)傳(陽明)傳に見えし(陽明)傳
を曰と云ひ、陽明の結語である。性極めて
剛毅であつたが、正徳十三年(一五二七)年
僅に三十一にして歿した。初め彼は正徳七
年、陽明の論學の語を録して「傳習録」と名づ
け、且つ序文を作り、同十三年に至つて、門
人孫汝が、愛の書に陸澄及び自己の録する所

を添附して度に刻した。これが本書刊刻の初
である。更に嘉靖三年(一五二二)八月十月、門
人南元光が、陽明の手に答へて學を論ずるの
書八篇を録して、「傳習録下巻」とし、前集を
合せてこれを刻したのが再刻本である。又嘉
靖七年の冬、門人錢謙益が、王汝中と號稱に
到つて、陽明の計を門人等に傳へ、三年にし
て遺言を録せんとした。徳洪は、その間の正に
記す所を録して送つた。徳洪は、その間の正に
切なるものを擇び、且つこれにその私録する
所を合せて、「陽明文錄」と共に刻せんとした
が、故あつて果さず、同三十四年、曾才漢が
徳洪の手抄を得、又傍ら自ら採録し、これを
遺言と名づけて刊刻した。徳洪はこれを覽
て、當時の采録を以てなほ不十分なりとし、
更にその遺言を刪削して、その三分の一
を録し、「陽明傳」と名づけて、復た陽明の
本西精舎に歸り、更に翌年に至り、竹思其の勳
めによつて、遺稿中の語を採らざるものをも采
つて一巻を撰、名づけて「陽明傳」と云ひ、これを宋
朝した(陽明傳)文獻。然るに現行本は續錄
を陳九川撰、續錄洪洪と、續錄を曾才漢撰、
續錄洪洪と、全くこれと異り、加之續錄は
多く實以勞の錄する所であるが、その由来は
詳かでない。從て續錄が續錄の原本によつて
初刻再刻、續錄を合刊し、大體同等の
附録を附録とし、續てこれを續録と名づ
けた。爾來これを刻する者が多し、互に異
同がある。本書の我が國に傳來したのは徳川
氏の初頭であらう。寛文年中これを翻刻した
ことがあるけれども、原本は極めて少い。降
つて正徳二年(一五二七)九月、三輪眞書が
原本を採録して、所謂刻本を上巻とし、再
刻本に三巻を加へて中巻とし、續録及び補遺

に晩年定論を加へて下巻とし、荆山の附録に
陽明の略年譜を加へて附録としてこれを合刊
し、最も多く世に行はれてゐる。續録は我が
國に於ける王學の唱道者中江藤樹に續いて興
つた者である。

【内書】續録本に從へば、上巻には徐愛の録し
た十四條、陸澄の録した八十條、藤樹の録し
た三十五條、都合一百二十九條。中巻には各
人論學書、答問遺書、答謝遺書(二卷)、
答謝遺書一書、答謝遺書小書、答謝遺書、
約の三篇。下巻には陳九川の録した十五條、
黃以芳の録した十七條、續録洪洪の録した十
五十一條、都合一百五十五條、これを續録とす
る。續録は凡て二十八條あり、この外に晩年
定論を添へ、附録は大學問、示録日仁廣試、
論語四條、齊坐私親、略年譜を收めてゐる。
【史的地位】王陽明の思想は、詳しくこれを
全體に因つて説はなければならぬことは云ふ
までもないが、その大綱は殆ど本書の裡に備は
つて居ると云つてよい。「小學」(近世儒學)は未
子學の教科書と云ひ得るならば、本書は一層
重要な意味に於て陽明學の教科書である。明
初成祖の時、朱子學に據つた勳臣の「四書五經
大全」を以て功令として以來、程朱の學が興隆
すると共に、陽明山の學は衰微する所であつた。
陽明の學が興隆するのには、多くは支那國情
の變に據れて、その眞面目は忘却せられてゐ
た。この時に當つて、陽明の學を承けて程朱
の舊説を破つたのが王陽明である。二子の學
説は、必ずしも同じくはないが、その大體に
於ける主要を一にするので、世にこれを併せ

て陸王の學とも云ふ。陽明の出たのは陸子(一)
八五二の後の約三百年である。陽明の學説は
大約、心即理、致良知、知行合一の三に歸す
る。これを三綱領と云ふ。心即理とは先に陸
子が樹立して、後に陽明が祖述した點で、
心即理、換言すれば、我が心即ち宇宙の實
在であるとする唯心の一元論である。これは
彼の學説の中心をなすもので、他の二綱領も
亦この前提の上に組織せられるのである。致
良知とは即ち先天的なる良知を發揮せんとす
るもので、吾人の心の虚靈明覺な所からこれ
を良知と名づけ、良知は即ち心の本体(實質又
は内容)と云つてゐる。而して心即理である
から、心の本体たる良知は理、即ち宇宙の
實在である。ただこれを虚靈を論別し得る方
面に於て、良知と名づける。知行合一とは、
彼に従へば、致知とはただその法を知るばかり
りでなく、必ずこれを實行して然る後に云ふ。
即ち彼は大學の所謂致知の知を良知とし、我
が心の良知を意の在る所の事物の上に致さな
ければならぬと説くので、その結果は當然知
行合一となる。致知の知を経験的知識と解
する朱子の先知後行説に對すれば、これは寧ろ
知行并進説である。彼は云ふ、「知は是れ行
の始め、行は是れ知の成るなり」と。又云ふ、
「知の眞切實なる處即ち是れ行、行の眞切實
なる處即ち是れ知」と。(註釋書) 陽明傳習
録三卷三篇(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録
陽明先生集要(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録

【参考書】王文成公全集(陽明)全集(陽明)全集(陽明)全集
陽明先生集要(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録
陽明先生集要(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録

田女(田) 伊人(姓) 各口氏(別) 用

【生後】安永八年(一七九七)七月二十日辰。
享年不詳。(墓所) 江戸淺草本願寺中書院院
【伊人】(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録
口傳の妻である。傳習録は江戸の人、紙書門
で、無事庵又木庵と號し、「延享二十(一七八)
以來在籍點者」として江戸座宗匠の一人であ
つた。安永三年の「かみ種」によれば、この
頃傳習は神田神保町に住み、田女は原貞
美子の娘に傳習と號して、一家三人點者
として立つてゐた。田女の生家は判明しない
が、若い時から傳習を好み、又學をよくした。
子が無いので傳習を養つて嗣とした。その神
子を受し給はした文によつて
も、子の無い淋しが窺はれ
る。晩年は年々に肥えたり、
わけても豊かに暮らした。安
永の初め頃、中風に罹り、醫藥を奏して
幸に輕快を見るに至つたが、同八年の春頃か
ら再發し、その初秋には要を知らずとして
歿生息なかつたが、その二十日の曉に遂に
歿した。なほ傳習が田女の發句と文章とを遺
傳し、これに傳習記一篇を添へたものに、「海
山」(遺稿)がある。(陽明)

【天神】(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録
陽明先生集要(陽明)傳習録(陽明)傳習録(陽明)傳習録

田女(田) 伊人(姓) 各口氏(別) 用



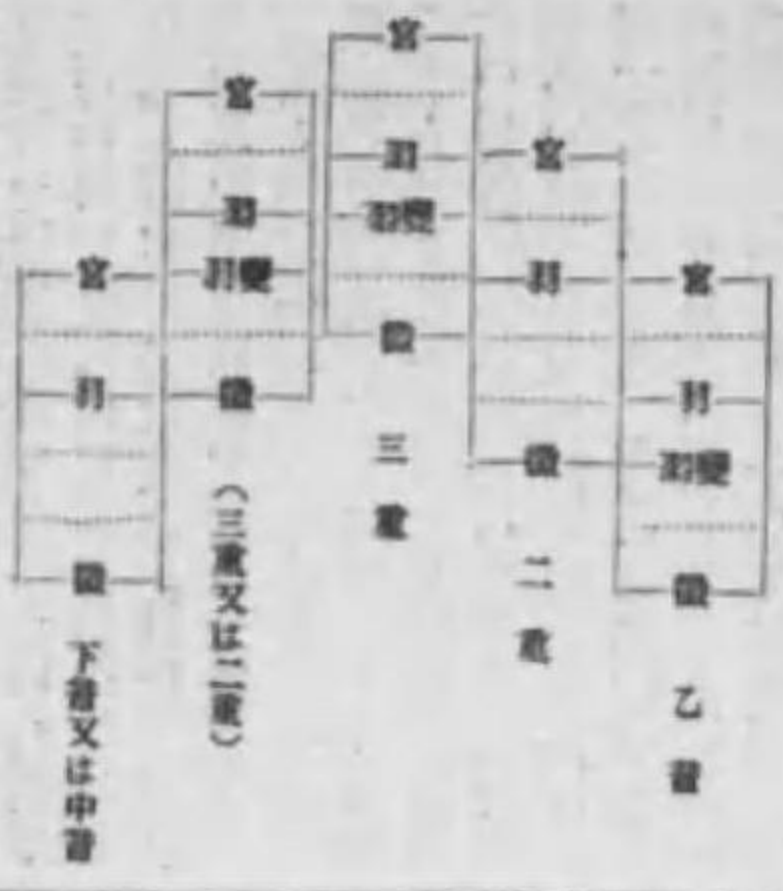
(本社神野北) 陽明天

れて居り、歸朝後直に興されし當行三昧の引...

こと等、屢々靈瑞があつた山が「元亨釋書」等...



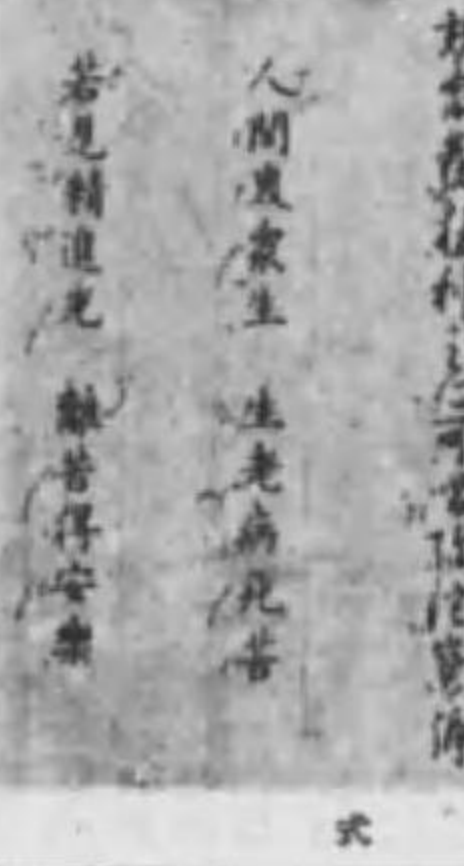
悉く聲明の曲を認め、「魚山聖賢自結」の編...



只博士等の別がある。古博士とは云ふもの...

と云はれてゐるものが少くない。日蓮宗・神...

僧衆が編立して唱へるものである。九段、十段...



の節とされたる。○引聲阿彌陀經、又は引聲...

を命ずる。(3)天帝人間に魂を授ける。月... (4)都屋住の二八星が色・意・非道... (5)二八星、天帝に對して...

【構想】人間世界の善惡の出来事は、すべて善... 星・惡星の操るためであるとし、その間に因果... 因縁の存在を知らせようとしたのが、一篇の...

の金氣を減らす。五倫の道が正しいと天が當... 天の川の端は皆誠である。下界で御直・...



本書の系統をひいた作中、「親善書... (1)「親善書」は「忠臣... (2)「天徳大綱」は「忠臣... (3)「天徳大綱」は「忠臣... (4)「天徳大綱」は「忠臣...

の中村座・市村座に於ける忠臣蔵をも思ひ出... されたであらう。繪組には「天徳和句文」から...

【構想】人間世界の善惡の出来事は、すべて善... 星・惡星の操るためであるとし、その間に因果... 因縁の存在を知らせようとしたのが、一篇の...

右方、共に文臺を立て、左方の詩人・念人... 新人は玉階の北端に列座し、右方の詩人念...

ふ。天人は喜んで、東遊の鞍馬を御ひ、やが... て上天するといふ曲。「別記」「神社考」によ...

性坊は天神記の四段第三編。紫宸殿以下は同じく五段。かくこの作の一・二・三・七・八・九番は殆ど全く先行二作品に據つて居り、五番の韻意は少しも見られない。五・六番目は見せ場であるが、これは「手習錦」の寺小屋と道明寺を抄本として、見物の換骨知識を理想しつつ巧みにそれを換骨筆記してある點に、單なる模倣とは本質的に異なるた歌舞伎作者としての手腕を、高く評価すべき價値が認められる。五つ目の長谷雄夫婦を寺小屋の源義夫婦に代置し、飛び梅の穴を行った松から、松の精を考へ出したリ、笑言美人を支持者に見立てて長谷雄を源義夫の中から出したリ、見物の耳に親しい寺小屋の臺詞を用ひて、「源義夫」や「首實掬」や戸浪のくどきや松王物語を具はせてある點は、極めて巧妙に効果をあげてゐる。六つ日も「八景」の裏を行つたのが面白い。梅王・松王・櫻丸に對し、三つ子の娘を白置し、鶯から「鶯」を導き出して、國太郎に彼姪の狂言を演じさせる等なか、妙である。なほ體裁を對象として描かれた時平が「天神記」の單純な敵役型から出發して、實感として一步を進めてをり、彼をして名を成さしめた點が注意される。また二つ目の幕切れが所謂笑ひ幕としての演劇史的點を提供してゐることは、傳奇作書が違つてゐる。「助書」この作は「手習錦」に對して、歌舞伎の天神記もの代表となつたが、原作の體裁は違つてゐない。今日では、「時平の七笑ひ」と「鶯」の件が行はれる。「七笑ひ」のみを權化して改作したものに明治三十年歌舞伎座の中幕「時平七笑ひ」があるが極めて不評であつた。記載に殘るもの中有名な書物（は、「梅王相傳」文化十二年中村傳、「天宮宮傳」

に即位の儀式を擧げらるゝや、同年二月、大海人皇子を正式に皇太子の位置に立たしめられた。三三一年九月の頃から天智天皇御不例、十月御崩御せられ、大海人皇子を召して後事を嘱せられた所、皇子は多病を理由として強ひて辭し、皇后を御位につけ、帝の御子大友皇子を皇太子として政治を攝政せしめ給ひ、自ら天皇の御爲めに出家して修羅せんと主張された。天皇凡てを聽許せられ、皇子は出家して宇治を経て吉野へ入られた。その年十二月三日、天智帝崩御給ひ、大友皇子即位し給ふ。弘文天皇これである。こゝに於て以前から天智帝を中心とする進歩主義の政策に不平な保守黨、近江源氏を不満とする大和の豪族、個人的に、大海人皇子の人柄手限を慕ふ一派等が相争つて皇子を支持して近江朝廷と對峙し、終に翌年六月に至つて戦闘開け、大海人皇子は紀伊の熊野に退き、諸皇子と共に吉野を出でて善名に到り、大伴氏を初め大和の貴族これに應じ、諸所の合戦を経た後、近江朝廷は東西南の三方を圍まれて、七月二十二日瀬田の大合戦となり、二十三日弘文帝は山城國山崎の地に窮して縊れ給へた。これが若名は壬申の亂である。この亂の兵火に近江の名は焼亡し、その廢墟の哀れさは人靡、黒人初め多くの人に不朽の名作をなされた。大海人皇子は大和に還り、飛鳥の地に宮室を營まれた。所謂飛鳥浄御原宮で、翌一三三三年、淨御原宮に即位された。これが第四十代天智天皇である。故に天皇の御名を「天智天皇」とする。今日の「明日香、海部、藤原、藤原、藤原、藤原」と記すのである。即位後、前代の唐模倣と變つて、専ら純日本風の政策をとり、國史編纂の事を志して、神田阿麻呂に古記傳を

の類」の長歌が、御製で有る無しは暫く措いて、内容表現共に「萬葉集」長歌のうち、代表的秀作と云はれてゐる。天智天皇御製「海部」を見よ。天智天皇御製「海部」を見よ。點料 佛語「名義」宗匠が門人の佛語に點をかけて受ける禮金で、朱料と云はれる。「消筆」佛人が點者を受つれば、自然門人から禮儀を受けなければならぬ。自徳門人から花嫁・宿にむかへば、佛師百組の點料として上洛の門人から、その國々の名産を謝禮に買つた事があると云はれる。併し彼は門人萬葉宗匠の計ひで、諸州の點料一兩といふ規程にした。その後野々口立願聖師獨立して點者となり、銀一兩と定めた。佛匠と門人が同様の禮金を取るのも如何とあつて、貞徳の方は五錢目に定めたらどうかといふ宗匠の建議もあつたと云ふ。消筆太平記。とにかく早くは佛師の間に美しい禮儀があつて、宗匠を會席に招くに、會が終つてから直ぐ謝禮を出すのでなく、翌日宗匠の家に挨拶に行く體に、一包かへへぎの上に載せて贈るといふ風であつたが、それも後には廢版になつた(ははは)。萬葉は生涯を放して送り、點料などを取つて暮した人ではなかつたが、門人中には其角・風雪のやうな傑作も多かつた。或る人が其角の許へ「一巻の點を取りよこした所、其角が見て、これは餘りに初心であるから、我が附屬を煩はす迄もない、連中の先例に倣はさい」と云つたので、使が是非なく物を受取り、さて點料を返してくれといふと、これは見質であるから返す譯にいかぬと言つたと傳へられるが、萬葉世に、其角は自分の物好きな點料を定めて取つた事はなかつたが、先方では志を厚くして返禮したといふ事である。譯向。漢々自分からは細めなかつたが、いつとなく百兩銀一兩・五十兩銀二友、歌仙一錢半といふ朱料にきまつたと云ふ。彼の佛士は朱料を書き附け、當座に贈らない人へは書附をやつて催促するやうになつた(佛語)。とにかく雪中庵・其角・其日能などといふ家柄の宗匠は、技術はしげらけ、その家格に相當な點料を買つてゐたらしく思はれる。明治以後新派が興つて、舊派の業佛も自然衰へて行き、點料を出して宗匠に添酬を乞ふ者も少くなつたが、それでも宗匠の間には、例へば雪中庵清規などといふものもあつて、添酬料を取つて(參考)花見車 高島博士○消筆太平記 北條聖生 ○諸書世説 高島博士 ○佛家奇人談 竹内孝一 (参考)

た所もある。文字の解釋は、「玉篇」の説の要旨を抜き、又往々「玉篇」にはない註を加へてある。「價値」關野王の「玉篇」(三十)は支那最古の字書の一つで、六朝及びその以前の時代、并に我が奈良朝前後の漢字の研究には必要とされざるものである。然るに「玉篇」は唐・宋と時代を経るに従つて、屢々改訂せられて、全く原本の面影を失つてしまつた。而して六朝時代のまゝの「玉篇」は支那で是れが散佚して、今日日本に全體の約半分、十四卷中ばかりを遺してゐるに過ぎない。然るに本書は、大體「玉篇」の面影を傳へて居り、且つ三十物全體が残つてゐる。即ち本書は「玉篇」の散佚した部分を補ふ唯一無二のものである。また現存の「玉篇」を校訂するために頗る貴重な資料である。なほ本書に記された漢書の筆名として、その古いこととに於て、最も珍重すべきものである。その字體は古印の字體と相似てゐて、漢書の研究には逸すべからざるものである。本書は、日本人の手に成つたものとして現存最古の字書である。(參考)弘法大師の文藝 西條虎太郎(日本文化史研究會) ○家説萬象名義 關野王(家説萬象名義一三四三) 家説萬象名義を著して 關野王(家説萬象名義一三四三) (關野) 天路歷程 關野王 (關野) 英國の傳道文學者 ジョーン・パンヤン(一九〇三)



八(明治二年)、上海刊行の支那譯に據つたもの(この支那譯の初版は咸豐三年、即ち幕末六年に出た)。この支那譯は前編のみで、後編は「天路歷程官話」として、同治八年上海で刊行されてゐるが、邦譯はされなかつた。譯者の署名はなかり上達古であらう。(二)明治十二年十一月東京十字屋刊本。「七十一巻」所載を

そのまゝ取つたものであるが、若干の字句の訂正と省略されてゐた漢詩が全部改竄され、又原行本の方には最初の約一丁に當る部分が白紙に改められてゐる。本書の譯者は従来依藤喜孝とされてゐたが、實際は村上俊吉の譯である。村上は關西五番館の重慶を興うてゐた支那で、文筆に長じた所から、多くの支那本の和譯を爲した。この本は明治十四年、同十六年に重慶された。(三)明治十九年刊本。譯者ホワイト(日本遊學教育會編。洋裝四六判。澤山の雅味ある銅版畫を挿入してゐる。文體も品のいい雅俗折衷で、これも原作の前編だけ。この譯は主として英譯によつてゐる。なほ文章の砕け方より推して、外人の手に成つたものとも思へぬから、多分ホワイトの口授を日本人の文筆になれたものが筆記語體したのもあらうか。これに二十二年、二十六年、三十四年等の重版がある。(四)明治三十七年十二月刊本。池本吉譯。洋裝四六判。挿畫も數葉ある。文學者の筆だけに讀んで面白いが、矢張り意譯の域を脱してゐない。これも十年ばかりの間屢々版を重ねた。(五)明治四十年十一月刊「天路歷程續編。池本吉譯。續編譯の最初。なほこれは四十四年十一月、前編四版刊行の間、これと合して一冊とした。(六)大正二年十二月刊本。松本雲舟譯。前・後編を併せてをり、割合に原本に忠實なものを特色とする。これも十七八版を重ねた。(七)昭和二年一月刊「全譯天路歷程。益本重雄譯。譯者はパンヤン研究者として基督敎界に知られてゐる人で、これが最も信頼すべき邦譯である。外に、抄譯、解説などの類も甚だ多い。「内容」著者パンヤンが「此の世界でふ遊野をさまよひつゝありしとき」、ふと或る大穴(パンヤンが掘じ

られた)でフワード洞に出逢ひ、その中で眠つたところ、面白い夢を見た。その夢が即ちこの小説中の出来事となつてゐる。クリスチャンなる人物が、「書(福音書)」を手に重荷を負つて「天」の市を出立する。彼の目的は、早くこの重荷を片づけて、「聖市」に辿りつきたいといふにある。彼は妻子諸人が歸れと呼ぶ聲に歸を斷ちながらも、イバシシリストの指示に従ひ、丘を越えて遙かな旅路に上る。この旅路は凡そ十段に別れ、その各々がキリスト教徒の生活の艱難と勝利を生々と描いてみせてゐる。試練・艱難・悲喜・平和・誘惑、何れも生ける人々の場合と異ならない。又出て来る人物が男も女も悉く生命をもつてゐる。パンヤンの藝術的天才は驚くべきものがある。場面も亦それぞれ吾等の靈的經驗を見ることが如くに表現してゐる。「失望」の泥沼、「美はし」の宮殿、途中の「獅子」、「扇」の符、悪魔アボリオンとの闘ひ、恐ろしい「かげ」の谷、「虚寒」の市、殊に有名なのは「疑ひ」の城で、こゝではクリスチャンはホープフルと共に巨人「絶望」のために牢獄に投げ込まれる。が、やがて「青春」愉快の山を綱、河を渡り、「歌」の市について、日出度く目的をとげる。だが氣がついてみると天國の門からも、「疑ひ」の市からと同じやうに地獄に行く道が通じてゐるのに愕然とした。「かくて我は眼さめ、その夢なりしを知つた」と、パンヤンは全篇を結んでゐる。

【参考】パンヤンと天路歷程 益本重雄 「書野」



日本文學大辭典
第二卷
著作權所有
(全三冊)

昭和八年四月十五日印刷
昭和八年四月二十五日發行
昭和九年七月二十五日第三回増刷

編纂者 藤村 作
發行者 佐藤 義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地
東京市牛込區矢來町七十一番地

新潮社

電話牛込(34) 八八八八
振替(東京) 一七四二番 〇〇〇〇
九八七六五番 番番番番

印刷所 富士印刷株式會社
印刷者 佐々木俊一

終